

鬼一法眼譚の構造

——『義経記』を中心に——

八 木 直 子

はじめに

『義経記』は軍記物語との位置付けがなされている。しかし、義経の一代記であるという点において、合戦の記述が中心の他の軍記物語とは、一線を画している。義経は、歴史の表舞台にいる時期が僅かであったため、歴史に登場しなかった時期を中心として、義経伝説が形成された。義経伝説に関与した人々は様々で、日本各地で語られた。つまり、義経伝説は、作者や産地を異にしながら、成長していった。

中でも注目されるのが、『義経記』において、編集上の乱れを生じさせてまでも取り入れたとされる鬼一法眼譚である。『義経記』の鬼一法眼譚については、五条天神や鞍馬寺との関わり、兵法と陰陽師たちの関与が指摘されてきている。

鬼一法眼譚を扱っている作品としては、『義経記』の他に、『義経記』とはほぼ同時代に成立したと考えられている御伽草子『判官都ばなし』、『御曹子島渡』、『皆鶴』が挙げられる。本稿では、鬼一法眼譚が諸作品によって、どのように扱われているのかを考察しようとするものである。

一 『義経記』巻第二

「義経鬼一法眼が所へ御出での事」について

奥州から都に戻った義経は、一条堀川の陰陽師鬼一法眼秘蔵の六韜兵法を盗みとろうとする。義経に心を奪われた鬼一法眼の姫君は、その手伝いをする。義経は兵法書を手に入れ、山科へと去ってしまう。残された姫君は、義経恋しさに、嘆き死んでしまう。

この『義経記』巻第二「義経鬼一法眼が所へ御出での事」で描かれている話は、大きく、八つに分類できる。第一に、義経が兵法伝授を願うという事。第二に、兵法の由来を語っている事。第三に、素性を明かす事。第四に、姫君と契り兵法習得に成功する事。第五に、姫君の父が激怒し、義経を殺そうとする事。第六として、湛海を遣わす事。第七として、義経は姫君によって難を逃れ、助かるという事。第八として、姫君が死に至るという事である。話の構造を知る上での手がかりとなる以上の点に留意して本文を見てゆきたい。合せて、表1を参照しつつ考察したい。⁽¹⁾

義経は、奥州から都に上る途中、山科の知人の所で、『六韜』の話を耳にするという設定である。

代々の帝の御宝、天下に秘蔵せられたりける太公望が六韜とて、十六巻の書なり。異朝にも我が朝にも伝へし人の一人として愚かなるはなし。

中国においては、太公望・張良・樊噲が読み、日本では、坂上田村麻呂・藤原利

表1 鬼一法眼譚の異同

話の筋	作品名				
	義経記	判官都 ばなし	御曹子 島渡	皆鶴	湛海
①兵法伝授を願う	○	○	○	○	
②兵法の由来を語る	○	○		○	
③素性を明かす	○	○		○	
④笛		○	○	○	
⑤歌のやりとり		○		○	
⑥姫と契り兵法習得	○	○	○	○	
⑦父が激怒、義経を殺そうとする	○	○	○		
⑧湛海との対戦	○	○			○
⑨姫の助言	○	○			
⑩姫君が死に至る	○	○	○		

仁・平将門らが、この『六韜』によって戦に勝ってきたという。これらの由緒が『義経記』『義経鬼一法眼が所へ御出での事』の冒頭に書かれている。その『六韜』を帝から拝領していたのが鬼一法眼であった。そこへ義経は『六韜』を所望しに行く。

「や御坊、それ程の事を企ててこれまで来たらんや。まことか御坊は異朝の穆王、本朝の将門が伝へたる六韜兵法という文を、天下より賜りて、秘蔵して持ち給ひたるとな。その文は私ならぬ物ぞ。御坊持ちたればとて、読み知らねば教へ伝へし弟子もよもあらじ。理を枉げてそれがしにその文を見せよ。百日がうちに読みて御辺にも知らずは教へて返さん」

物語の冒頭に『六韜』の威厳性を説き、本来の目的である兵法習得を印象付けている(②)。義経のこの高飛車なものの言い方に、鬼一法眼は激怒する。しかし、義経はここで鬼一法眼をそれ以上怒らせてはなるまいと、

「よしよし暫し。一字読まねども、法眼は師なり。半字を読まねども義経弟子なり。それを背きて斬らんと思へば、堅牢地神の恐れあり。法眼を助け置きて

こそ、六韜兵法の在り所を知らんずれ」

と思ひ直す。これは義経が兵法を取得したいという気持ちが見えたと場面である(①)。そうしているうちに、義経は、法眼の家に仕えている「かうじのまつ」という女房と親しくなる。何とかして兵法を見たい義経は、「かうじのまつ」に相談してみる。

「か様に知る人となるも、この世ひとつならぬ契りにてこそあるらめ、隠しては詮なし。人にこの事知らすなよ。我は左馬頭の子、源九郎といふ者なり。六韜兵法といふ物に望をなすによりて、法眼も心よからねども、か様にてあるなり。その文の在り所知らせよ」

他言しない事を条件に、義経は「かうじのまつ」に素性を明かす。法眼には三人の娘がいた。そのうち、二人の娘婿が「平宰相信業」と「鳥飼中将」である。これは、この高貴な身分に対抗するために義経が身分を明かしたと考えられる。また、この時点において素性を明かす事によって、後に姫に求婚する際に、または、兵法習得にも有効であったとも考えられる(③)。

「かうじのまつ」は、兵法を手に入れるためには、法眼がたいそう可愛がついてる姫君に近づくことを提案する。

「さらば御文を遊ばして賜り候へ。法眼の斜ならぬ、いつきの姫君の未だ人にも近付き給はぬを賺し参らせて、御返事を取りて参らせん。男女の御習ひなれば、近付かせ給ひなば、なかはこの文を取りて御覽せさせ給はざらん。」

こうして、義経は、姫君と契りを結び、兵法書を手に入れる。ここにおいて、「かうじのまつ」という女房が、兵法習得に大きな役割を果たしていることがわかる。また、女房が「かうじのまつ」という名が見えるのに対し、「かうじのまつ」が仕える姫君については、名が記されていない。その事には、どんな意味があるのだろうか。

姫君と義経との関係を知った、法眼は非常に怒って、北白川の東海湛海坊に命じて義経を斬らせようとする。

「御辺を呼び奉る事、別の仔細なし。去んぬる春の頃より、法眼がもとにさる体なる冠者一人候。聞けば左馬頭の子と申す。助け置きては悪しかりぬべし。

御辺よりほかは頼むべき人もなし。夕さり五条の天神へ参り給へ。この人を賺し出だしたるものならば、頭を斬りて、それがしに見せ給へ。さもあらば五六
年望み給へる六韜兵法をも御辺に奉らん」

義経同様、湛海も、兵法を手に入れたと思っており、法眼は、湛海に義経を討つ事の交換条件として、六韜兵法を伝授する事を約束している。印地の大将という立場にある湛海にとって、やはり『六韜』は習得しておきたいものであった。また、『六韜』の重要性を説く事によって、この『義経記』では、義経の兵法習得を主題として扱っているように考えられる。

そして、法眼は、義経を騙し湛海に討たせるべく、五条天神に向かわせる。しかし、義経は、姫君によって法眼の企みを知ることになる(⑨)。

「悲しきかなや。父の心をかねて知りたれば、人の最期も今を限り、これを知らせんとすれば、父には不孝の身たるべし。知らせじと思へば契り置きつる言の葉皆偽りとなりはてて、夫妻の恨み後の世までも残るべし。つらつら思ひ続けるに、親は今生一世なり。男は来世までの契りなり。とても人に別れて片時も世にながらへてあらばこそ、憂きも辛きも忍ばれぬ」。親の命をば思ひ棄て、男にかくこそ知らせける。

姫君は、父と夫の間にあつて悩み苦しむが、「親は今生一世なり。男は来世までの契りなり。」と考え直す。父の命令に背き、義経への愛情を貫く事にする。ここには、姫君の義経への愛情の深さや、思い詰めた様子が切々と描かれている。そして、この姫君の思いやりによって、義経は危難をまぬがれ、無事に兵法習得に成功する。一方、義経に去られた後の姫君は、

法眼が娘は後にひれ伏し泣き悲しめども甲斐ぞなき。忘れんとすれども忘れられず、微睡めば夢に見え、醒むれば面影に立ち、思ひは弥増りすれども、思ひ慰む方もなし。冬も末になりぬれば、思ひの数や積もりけん、物の気など言ひしが、祈れども叶はず、薬にも堪まらず、灸治にもならず、十六と申しけるに、終に嘆き死ににぞ死ににける。

姫君は、義経を恋しく思うあまり、嘆き、とうとう死んでしまう。

ここまで読み進めてみて『義経記』では、大きく分けて、二つの話の要素に気付

く。まず、鬼一法眼と兵法書という話の筋に加え、姫君とその手引きをした女房の事が描かれている。あくまでも、冒頭に兵法書の威徳が語られ、義経だけでなく、印地の大将の湛海までもが『六韜』を手に入れたがっている事からも、義経の兵法習得が主題として扱われている。その兵法習得という主題と平行して、姫君が兵法習得に欠かせない重要な存在として描かれている。また、同じく、「かうじのまつ」という女房についても、義経と姫君との架け橋をしており、ひいては、兵法習得のために大きな役割を果たしているといえる。『義経記』特有の点については、第五節で述べる。

二 『判官都ばなし(別名 鬼一法眼)』について

御伽草子『判官都ばなし』は五巻に分かれており、室町時代の成立とされている。概略を述べると、以下の通りである。義経が鎌田少進に案内され、鬼一法眼の所へ兵法伝授を願うに行く。法眼は、以前から鞍馬の多聞天に黄金の太刀七振りを持納したいと考えていた。そのため、義経が黄金作りの太刀を持っていると聞き興味を持って対面する。法眼は、義経の雰囲気を感じて、この様な人物の財を取る必要はないと屋敷に引きこもってしまう。義経は七日七夜、法眼の屋敷で待つ。すると、八日目に法眼は、兵法の由来を語りはじめた。そして、法眼の屋敷に居座っていた義経は、村雨丸という笛によって法眼の末娘と結ばれる。ある日、法眼が熊野詣に出掛けた。その隙に、義経は娘に手引きさせ、兵法を書き写す。これを察知した法眼はとうかい坊に命じ、石山寺において、義経を斬らせようとするが、却って、義経に討たれる。義経は、姫君に初めて本当の事を打ち明け、添い遂げられな
いと言う。義経に去られた姫君は、あまりの悲しみに耐えられず死んでしまう。父法眼は娘の屍を前に嘆き崩れる。一方、義経は、その後、天下に名を馳せる事になる。

『義経記』巻二「義経鬼一法眼が所へ御出での事」(以下、『義経記』とする)と同様に、話の展開のポイントとなる八点へ①兵法の伝授を願う②兵法の由来を語る③姫と契り兵法習得④姫君の父が激怒、義経を殺そうとする⑤湛海との対戦⑥姫の

助言③素性を明かす⑩姫君が死に至るに留意して、『判官都ばなし』を検討してみたい。

①兵法の伝授を願うに關しては、まず、この物語は、義経が鎌田少進に連れられて、鬼一法眼の屋敷にやってくるから始まる。

御内にて兵法習ひ申候よし、語りて候へば、小冠者、これも奥州にて、都にゆ、しき法のありと承りて、罷り上り候と申候。

また、鬼一法眼が、兵法の由来を語る直前の会話においても、法眼の奥州のどこから来たのかと言う質問に対して、

平泉の磐手・栗原山の者にて候。兵法の及び難く候へども、其志にて罷り上りて候。

義経は、奥州から兵法を得んが為に、都に上って来たという事が二度に渡って描かれている。それは、義経は、亡父義朝の敵討ちをするべく、都へ上り、兵法を習得し、その時に備えるという本来の目的が明示されている。

この冠者黄金を使ふ事得て候が、定めて黄金の二三千両も用意してぞ候はん。

鎌田少進は、鬼一法眼に、義経の持参した黄金を交換に、兵法を教えてやってほしいと述べる。『義経記』においては黄金を持参したという事は記されていない。

義経が二三千両持参したというのは、その背後に奥州藤原氏の後ろ楯があったようにも解釈できる。

また、義経と鬼一法眼が初めて対面した場面においては、以下のように述べている。

いかめしの人の眼ざしや。平家の中に、遍き人の重く思ひ奉りし、小松の内大臣重盛の卿の有様に少しも劣らぬ人の瑞相かな。背こそ小さくましませども、十万余騎の大將にも不足あらじ。但し此殿が魂、分に超えて我朝には符合せず。されば三十に幾程もあらで、減び給ふべき瑞相あり。

平重盛にも劣らぬ器量を持った人物であると鬼一法眼は義経を見ている。これは、平重盛と比較することで、義経が源氏の御曹司であることを強調していると考えられる。さらに、重衛は、平家一門の中においても、武勇に秀でた人物として描かれている。しかし、南都炎上の罪に問われ、悲運の生涯を閉じることになる。一

門のために活躍したにもかかわらず、短命であったという点において、義経と重衛は共通である。また、義経は「流浪の人生」を送ったとされるが、ここにおいては、きちんとした後ろ楯のある御曹子義経として描かれている印象を受ける。これらのことから、『義経記』の同場面より、義経の兵法習得の目的が明確に描かれている。また、義経を源家の御曹司として描こうとする傾向が窺える。

②兵法の由来を語るに關しては、『義経記』では、山科の知人によって『六韜』の由来を初めて聞く事になっている(第一節にて述べた)。しかし、ここでは対面しようとしないう鬼一法眼の屋敷に上がりこみ、義経が七日も居座ると、ついに鬼一法眼の方が折れて、兵法の由来を語りだす。

昔美濃守すけもりが威勢にあらず、また相馬守将門の時、八か国を従へて、我が身を平新皇と称し事も、将門が威勢にあらず。これも兵法少し聞奉りし力なり。

美濃守すけもり・平将門が、この兵法によって力を得ただけ書かれている。

『義経記』では、坂上田村麻呂・藤原利仁・平将門らがこの兵法に依ったという事が、『判官都ばなし』より詳しく描かれている。また、震旦の樊噲・張良については、多くの紙面を割いて書いている。³⁾『義経記』と同様に、兵法の威徳を語ることによって、ますます、兵法の重要性が増していく。以上の事からも、兵法書に重点を置いているという事がわかる。

⑥姫と契り兵法習得に關しての問題点は、女房の役割、姫君の役割、笛の登場、鬼一法眼の不在の四点に集約されると考えられる。

兵法書の由来物語を法眼から聞いた義経は、法眼の末の姫君に近付いて、兵法書を手に入れようと考えた。『義経記』においては、「かうじのまつ」という女房の勧めによって娘に近付こうとするが、この物語では義経が姫君に憧れて、笛を契機に姫君、女房らと関わっていく。姫君に仕えている女房としては、「冷泉・更科・月さへ・花みつ・くまへ・九重・柳・桜」という名が挙がっている。とりわけ、義経と姫君との間で、橋渡し役を果たしたのが、「更科」である。「更科」について触れられている箇所を抜粋してみる。

乳母更科殿は、紫檀の琵琶に黄楊の撥取り添へて、撥音けだかく掻き鳴らし、

しんじやうの江の辺の琵琶の音も、かくやと覚へたり。

義経の笛と姫君の琴に合わせて、「更科」が琵琶の名手であると描かれている。

また、「更科」が義経に自分の身上を語る場面では、

姫君の御乳母に、更科殿とて何事にも暗からず。(中略)われは都の者にても候ず。筑紫松浦党の大將に、まはら(ママ)左衛門他界の時、並びの豪家に所領を奪はれ迷い歩きしに、商人の手に渡り、都の方へ上り、東國の方へ下るべかりしを、鬼一法眼由緒ある者と御覧じて買ひ留め給ふ。はかしく候はず候へども、数の草紙昧き事なき故に、姫君に教へ申せとて置かれたり。

名は更科と申候。心に残ること無く侍れども、故郷も思へば、心苦しき侍る。

女の身ほどをのづから、頼りなきことこそ候はね。昨日今日とは思へども、十七の年より早、十八年のはるく送り候なり。

筑紫国から、事情があつて都に連れてこられた事、草紙に精通していたため、姫君に仕えることになった経緯が書かれている。義経は、これを聞き、「更科」に、姫君への文の取次ぎを頼む。また、「四百四帖の歌草紙、百廿帖の恋尽くし、昧き事なし」、「更科殿は歌をも詩をも、人に勝れて結びし」と「更科」は描かれている。このように和歌にも漢詩にも通じていたからこそ、機転を利かせて義経と姫君の間を取り次ぐことができたのである。こうして、義経の望みが叶って、姫と契りを結ぶ。

次に、姫君については、『義経記』においては、その人となりについては、一切触れられていないのに対し、

三は洛中一の美人なり。三十二相具足して、琵琶・琴・和琴究めて、法華妙典聞からず。和歌の道も達者なり。古今・万葉・伊勢物語・源氏・狭衣・恋尽くし・硯破をはじめとして、数の草紙を読み覚え、仮名・真名にいたるまで、並ぶ人こそなかりけり。

かの姫君、明け暮れ管絃をぞ好まれける。

管絃を好み、和歌、草紙、物語に至るまで、上流階級の子が習得すべき教養を総て網羅している姫君として描かれている。

また、姫君と出会う際に、「村雨丸」という笛が登場する。笛については、『義経記』の同場面には登場しない。義経は、管絃にも通じており、笛の名手として設定されている。この事は、義経の貴人性を高める事に役かっている。

村雨丸と申すは、筑紫博多にめうてんと申ける船頭、常に唐へ渡り候に、黄金千両持ちて渡り、唐土の帝に献つる。(中略)吹き手にをいては御曹司、我朝一にておはします。

筑紫国博多の「めうてん」という船頭が、唐の帝に千両を献上したところ、唐土の三千七百五十餘国に名を馳せた長安城の漢竹、村雲丸と村雨丸の二管を賜わった。その村雨丸を手に入れた義経は、下草侍従に習い、日本一の吹き手となる。この由緒ある笛の音を聞いた姫君や女房達は、その素晴らしさを知って、義経の吹く村雨丸に調子を合わせて、管絃を始める。『義経記』においては、義経と姫君との出合いの場面に、笛という媒体はなく、ただ、文が交わされるだけである。⁵⁾

それから、この場面において、指摘しておきたいのは、鬼一法眼の不在ということである。義経が初めて姫君らと管絃をする時、「今宵は上の御留守にて候。」とある。このことは⑦の場面にも、関わるので、後述する。

まとめとして、『義経記』においては、姫君や女房に関する記述はなく、姫君については名前すら、書かれていない。義経と姫君とのやりとりについても、『義経記』はあつさりとはんの数行で済ませているのに対し、ここでは、管絃の催し、和歌のやり取りなどを盛り込んで、紙面を費やして、この物語の一つの見せ場と化している。また、『義経記』には登場しない、笛であるが、『判官都ばなし』では、義経と姫君の出会いに有効に働いている。姫君や「更科」が、和歌や物語に通じ、管絃を好んでいたという描き方と、笛の登場は、王朝物語の雰囲気を出している。また、この場面において、鬼一法眼の不在については、義経と姫君との恋に焦点を絞って描きたいという作者の意図が窺える。

④姫君の父が激怒、義経を殺そうとするについては、姫君の部屋の方から、義経の吹く笛の音に気付いた法眼は激怒する。鬼一法眼は自ら、長刀を持って、義経を殺そうとするが、娘の気持ち察して、思い留まる。

今日は上臈達の入らせ給ふ。東の冠者を御覧じて、これはいかなるものぞと宣

は、しどけなき下郎どもが、あれこそ法眼の忍びの婿よと申したらば、公卿・殿上人婿に嫌ひて、賤しき東國の冠者婿に取りけるかなど笑はせ給はん事面
目なきとて、上臈達の入らせて御帰りあらんまでは、這奴傍らにあれ

この場面において、義経はまだ、兵法を習得しておらず、鬼一法眼は、姫と契つた事に対して怒っていることが分る。また、殿上人らに対する体裁を気にしている。⁶⁾あまりに怒った、法眼は、

いかにとして冠者を討たんと思へば、心鎮まらず。かくてさてあらんと思へども、他の人目も恥づかし。よく／＼物を思へば、鬼一熊野へ参りなん。その留守に女男の習ひにて、近づきたと言わん時は、鬼一少しの恥をのがれんとて、わが一門相具して、二百餘騎にて熊野へとぞ参りける。

と、現実逃避のようにして、熊野参りへと出掛けてしまう。義経にとっては、鬼一法眼の不在はまたとない兵法習得のチャンスでもある。また、場面⑥において、鬼一法眼は不在で、ここにおいても、鬼一法眼が登場してこない事によって、義経と姫君を基軸とする話が展開しているように考えられる。

⑧「湛海との対戦」については、鬼一法眼は、「兵法を見奉らぬ前だにも、人に変りたる者なり。まして況や兵法を、残るところなく見奉りたる間、鬼一とても人ともよも思はじ。」と、誰かに義経を討たせようと考えてる。そこで、鬼一法眼の婿でもある「とうかい坊」に討たせることにする。この話の最大の目的が、義経の兵法習得だとすると、目的達成後に、義経と「とうかい坊」が対戦するという話の流れには、どういう意味があるのだろうか。この事に関して、野中氏は、「義経湛海戦ばなしが兵法獲得ばなしと本質的には一体のものでなく、後に結合したことを示唆するものである。」と述べられている。この「とうかい坊」との対戦において、注目したいのが、姫君の助言である。

⑨「姫の助言」については、父鬼一法眼から義経に、「とうかい坊」を石山で斬るようという話を聞いた姫君は、

石山へ御参り候事、思し召し止まり給へ。その上父の法眼、とうかいを召し、東國の冠者を討たせんと御約束の候と承り候。これに引き籠らせ給ひて、御敵寄せたらば、太刀の目貫の堪へんほど、闘わせ給ひて、敵ひ難くば、自らを

殺し給ひて、其後御腹切らせ給ひて、二世の菩提まで召し具せさせ給へと、人目も知らず嘆き給ふ。

と、父法眼の思惑を義経に知らせる。しかし、義経は姫君の助言には従わず、石山へと向かう。それは、対戦に応じないのは、義経にとって不名誉なことに当たるからである。

御曹司このよしきこしめし、御理にて候へども、石山へと約束申て止まり候へば、冠者が不覚にて候ほどに、……

義経自身が、以上の様に述べている事からもわかる。ここでは、姫君が、夫である義経が、父の策略によって殺されようとしている。その事から救おうとする一心で助言したという事を表現したかったのではないかと思う。⁸⁾『義経記』と比較すると、姫君が父と夫との間で葛藤した心情は描かれておらず、姫君が義経への危難から救おうとする一心で助言するという点において共通である。

③「素性を明かす」については、鬼一法眼の策略を知りつつも、「とうかい坊」を討った義経は、鬼一法眼の屋敷に戻り、姫君に別れを告げる。その場面で、

御曹司宣ひけるは、一人だにも忍び難く候その故は、平治合戦に亡び給ひし左馬頭義朝、常盤腹の末の子に、童牛若、今東國冠者義経とは我事にて候へば、身一人だにも忍び難く候。

と初めて、姫君に自分の素性を語り、一緒に添い遂げられない事をさす。そして、姫君は、源氏の嫡流の子息と知って、尚更、名残が尽きないと思う。

姫君このよし聞こし召し、いかなる時此君と契り初めぬぞ。なか／＼人知らざりしかども、さうと情けを籠めしより、類なくこそ思ひしに、今は源氏の大将、東國の義経と名告り給へるより、いと名残は増さりける。

『義経記』では、もつと前の場面義経が女房の「かうじのまつ」に近付いた時点で、「かうじのまつ」に素性を明かしている。『判官都ばなし』では、義経と姫君との別れの場面に、義経の素性を明かしており、兵法習得に影響を与えていない。

⑩「姫君が死に至る」場面について。義経に去られた姫君の様子は、以下の通りである。

御曹司今の名残を留めても、いつの別れか浅かるべしとおぼしめして、情け無

く出で給ふ。姫君縁まで走り出で歎かせ給へども、搔き消す様に失せ給ふ。乳母をはじめ女房達、姫君と一つ枕に臥し並び、歎かせ給へども甲斐ぞなし。恨めしきことかぎりなし。姫君は明け暮れ衣引き被つぎ、起き伏し歎き給へども、その甲斐さらになかりける。御曹司の出でさせ給ひて十一日と申に、姫君は儚くならせ給ふ。乳母をはじめて卑しき賤女に至るまで、歎き悲しむその声は、叫喚・大叫喚の罪人の叫ぶもかくやと思ひあはれなり。

姫君の援助があつたからこそ、義経は、兵法を習得できたにもかかわらず、義経は、あつさり、姫君を捨て、立ち去ってしまう。

また、表1には分類されていないが、『判官都ばなし』に記されている義経の活躍について簡略に述べたい。活躍譚については、二度、書かれている。

a、兵法によって、義経が戦で勝利を治めるという話（「とうかい坊」と対戦する以前に記されている）

この兵法の力にて、度々の軍に遇つれども、更に不覚はなかりけり。元暦元年に、宇治川を渡して木曾殿を討ち、鴨越を落して平家を治め、讃岐國桑山合戦、長門國井津・引島・文字・赤間・壇の浦の合戦、平家を滅ぼし、北国へ下らせ給ふとて、梶原に讒言せられ、兄鎌倉殿と仲不和にならせ給ひ、都へ還らせおはしませしに、討手度々上りしかば、西國へ下らせ給ひける。船にてありければ、大風に放され、津國にけんし山と申ところへ落ち給ふ。大衆に攻められて都へ還り、或人の姫君を通ひ取り、稚児に作り奉りて、わが身と郎党山伏の真似をして北国にかゝり、奥州を頼み下りしに、数の關々うち破り、奥州へとて下られける。これをはじめて、大事の軍に遇ふ事七十五度、小事は数を知らず。一度も不覚はなかりける。朝敵亡し、日本半國の主となり給ふ。

この話は、義経が兵法習得後に書かれており、この兵法によって、日本半國を治めることができたという様に読むことができる。しかし、『義経記』には、書かれていない。

b、義経のその後（物語の締めくくりに書かれている）

御曹司は後に都へ上り、御世に出給ふ。めでたかりしことどもかな。

以上のa・bの二点は、『義経記』には見られない記述である。義経の活躍は、

この兵法によって、支えられていたものだという事を改めて強調した箇所と考えられる。

第二節のまとめとして、話の構成は、ほぼ『義経記』と同じと言える。それは、第一に、義経が兵法伝授を願うこと。第二に、姫君と契り、その手を借りて兵法を取得すること。第三に、姫君の父がそれを知って、激怒し、義経を殺そうとすること。第四に、義経が姫君によって危機をまぬがれ、命が助かること。第五に、その姫君が、義経に去られた後に、死んでしまうこと。以上の五点において、共通である。義経の兵法習得を基軸にしながら（①・②・⑧）に紙面を多く割いている点において、そこには、「義経と姫君との恋と結婚譚」と「女房更科らの活躍」（⑥・⑨）にも、同じと言えるくらい重点をおいて物語が展開されている。

三 『御曹子島渡』について

最初に、あらすじを述べると、『御曹子島渡』では、義経が、藤原秀衡の助言をうけて、大日の法という兵法書を得るために、馬人島・裸島・女護の島・小さ子島など、多くの不思議な島をめぐり、たいとう丸という笛の功徳によって、しばしば危険な所のがれて、ついに蝦夷が島の千島の都に到着する。そこで、鬼の王かねひら大王と師弟関係となつて、その娘の朝日天女と契りを結ぶ。この天女の導きによつて、大日の法を写しとつて、日本の国に逃げ帰る。天女は義経の犠牲となつて、無惨な最期をとげるが、義経は大日の法によつて、源氏の興隆をもたらしたというものである。この物語は、先ず、義経が様々な島を巡る「英雄の異郷遍歴譚」である。次に、数々の困難を「笛の功徳」や「神仏への祈念」によつて打破すること。そして、あさひ天女の捨て身の援助によつて、兵法を習得する。以上の三点に集約できる。

表1に従つて、『義経記』と『御曹子島渡』では、どのような話の筋の異同があるのか、確認してみたい。

①兵法の伝授を願うについて。この物語は、義経が藤原秀衡に都へ上る手段を訊ねる場面から始まる。

さるほどに、御曹子、秀衡を召されて、都へ上るべきやうを問はせ給へば、秀衡承り、「日本国は神国にたまはしませば、武士の手柄ばかりにては成りがたし。これよりも北州に一つの国あり、千島とも、蝦夷が島とも申す。その内に喜見城の都あり、その王の名をば、かねひら大王と申しけり。かの内裏に一つの巻物あり、その名を大日の法と申して、かたきことなり。されば、現世にては祈禱の法、後世には仏道の法なり。この兵法を行ひ給ふものならば、日本国は、君の御ままになるべし。何とぞ御調法あつて御覧候へ」と申し奉れば、……

秀衡によって、日本は神国であるから、武士の手柄だけでは成功しない。だから、「かねひら大王」の持っている「大日の法」を御覧になれば、日本国は、あなたの思いのままになるでしょうと、兵法取得を促された。傍線の「都へ上るべきやう」というのは、「平家を討ち取って、天下をとる」と理解できる。このことは、義経の兵法習得が、あくまでも、天下を討ち取るためのものであり、引いては、父義朝の敵を討つためという目的意識を明示しているように思われる。そして、義経が実際に、かねひら大王に大日の兵法を教えてもらうように頼む場面では、

「恐れがましきことなれども、この内裏に大日の兵法のましますよし承り及び、これまで参りて候ふなり。御情に、御伝へありて給はり候へかし」とのたまへば、大王きこしめし、「あらやさしのくわんきよがこころざしや。難なくこれまで来り、師弟の契約と名のるぞや。七生の契りなり。一字千金の理、師匠の恩は七百歳と説かれたり。……(略)」

と義経は、直接、かねひら大王に兵法の教えを請う。そして、大王も、「りんしゆの法」、「かすみの法」、「こたかの法」、「きりの法」、「雲居に飛び去る鳥の法」までは、快く教える。が、それより奥義は、口頭で教えても無駄として、立ち去ってしまう。ここには、『義経記』や『判官都ばなし』にあった、女房や侍女の介入は見られない。また、傍線の「七生の契りなり。一字千金の理、師匠の恩は七百歳と説かれたり。」と大王が語っており、師弟関係の深さを示している。これも、先述の二作品には見られなかった⁹⁾、この作品の特徴とも言える点である。

〈②兵法の由来を語る〉に関しては、『義経記』、『判官都ばなし』がそれぞれ、紙

面を割いて、語っていたのに対し、ここでは、あさひ天女によって、『義経記』では、山科の知人、『判官都ばなし』では、鬼一法眼が語っていた。)

「葦原国へ参ること、ゆめゆめならざることにてあり。名残惜しみの物語に、この兵法の威徳を語り聞かすべし。……

とある。以下は、義経が、大王の追手から、逃走するための方法を姫が語っている、兵法の威徳を語るといよりは、むしろ、逃走の為に兵法の使い方を教えているといったものである。

〈③素性を明かす〉については、義経自らが素性を明かす場面はない。

〈④笛〉については、この物語で重要な役割を担っているのが、笛である。義経は、大日の兵法がある千島の都に行くまでの間、三度も笛によって危難から逃れている。先ず、女護の島で島の守り神にするために、捕えられようとした場面で、

義経、今を限りとおぼしめし、「少しの暇をたび給へ。竹を鳴らして聞かせん。」とて、たいとう丸を抜き出し、干五上勾中六下口とて、八つの歌口に花の露を吹きしめし、時の調子を取り、黄鐘にて吹き給へば、女どもは、これを聞き、「おもしろいぞや、冠者。島の守りにしたけれども、竹を鳴らすおもしろさに、しばし許し申さん。」と、鉦を投げ捨て、笛をこそ聞きにけれ。

と、笛を吹いて、どうかその場を繕って脱出することができた。次に、蝦夷が島では、島人に周囲を取り囲まれて、

島人にのたまふやうは、「少しの暇をたび給へ。竹を鳴らして聞かせん。」とありければ、少しくつろげ奉る。その隙に、たいとう丸を取り出し、音取りすまして、万秋楽といふ楽を、しばし吹かせ給へば、島人、これを聞くよりも、竹を鳴らすがおもしろきに、いかほども鳴らせとて、みなみな静まり、笛を聞きてぞゐたりける。

と、再び、笛で命を取り留めることができた。その次に向かった千島の都では、鬼どもに、餌食にされかかった時、

せめての名残とおぼしめし、少しの暇を乞ひ給ひ、たいとう丸を取り出し、干五上勾中六下口とて、八つの歌口花の露にてうちしめし、時の調子を取り合わせ、(中略)今ぞ限りと吹き給へば、阿防羅利は、これを聞き、「餌食にはした

けれども、竹を鳴らすがおもしろければ、許して吹かせ聞かん」

またもや、命が助かった。この三度の笛による命拾いに加えて、かねひら大王とあさひ天女との出会いにおいても、笛が契機となった。大王との対面の場面では、

「なんちは、竹とやらんを鳴らすと聞く。吹け、聞かん」と言ひし有様、恐ろしきことは限りなけれども、思ひまうけたることなれば、たいとう丸を取り出し、(中略)ここを先途と吹き給ふなり。大王、つくづくと聞き給ひて、なめならず喜び、「さても、奇特に鳴らすものかな。……」

笛の音を聞いて喜んだ大王は、義経と師弟の契りを結ぶことになる。また、義経の吹く笛の音を気に入った大王は、酒宴で義経を呼び寄せ、笛を吹かせる。そこで、あさひ天女と出会う。

楽はさまざま多けれども、男は女を恋ふる楽、女は男を恋ふる楽、想夫恋といふ楽を吹かせ給へば、天女は、これを聞きとがめ、くわんきよがみづからを心にかける、やさしさよとおぼしめす。

笛によって、姫の心をとらえることができたのである。また、この笛に関しては、『義経記』には、記述はない¹⁰⁾。『判官都ばなし』では、やはり、笛が姫君との出会いの場面で有効に働く。しかし、この物語では『判官都ばなし』にあるように、笛の功德が詳しく述べられていない¹¹⁾。

⑤歌のやりとりについては、義経があさひ天女への求愛の場面において、和歌は交わされていない。

⑥姫と契り兵法習得へに関しては、笛によって天女への求愛に成功した義経は、やがて契りを結ぶ。そして、心も打ち解けあったころ、義経が、兵法を見せてもらいたいと天女に頼む。しかし、その望みには答えられないと断る。

「ここに譬への候ふぞや。父の恩の高きこと、須弥山よりもなほ高し、母の恩の深きことは、大海よりもなほ深しとは申せども、親は一世の結びなり。不思議なりとよ、夫婦は二世の契りぞかし。一夜の枕を並べしも、百生の契りにて侍るなり。御身とわれとは、ことさらに蒼波万里を隔てたれども、まことに多生の契り深きことなり。何とぞ案をめぐらして、かの巻物を、一目見せてたべ。」

義経は、一世の親子のよりも、二世のである夫婦の縁を強調して、どうにか、智慧をしぼって、大日の法を見せてくれるように頼み込んだ。『義経記』でも、姫君によって、同様の事が語られていた。(前述)大王との師弟の契約を結ぶ場面では、「七生の契りなり。一字千金の理、師匠の恩は七百歳と説かれたり。」と師弟の縁の深さについて語られており、ここにおいては、二世の夫婦の縁を強調すること、天女を説得している¹²⁾。

⑦姫君の父が激怒、義経を殺そうとする場面について。『義経記』と『判官都ばなし』では、義経が姫君と契った事に対して怒っているような描き方されていた。しかし、この作品では、

大王仰せけるやうは、「あの姫は、去年三月に母に離れ、心慰む方もなし。竹を鳴らして聞かせよ。」と仰せあり。酒も過ぐれば、大王御座敷を立ち給へば、天女ともに立ち給ふ。御曹子も慕ひ行かせ給ひ、……

となっていて、大王は、姫を笛で慰めるよう義経に促している。大王は、義経と姫君が契っても構わないようにも見える。つまり、天女と契ったことよりも、兵法を奪われた事に腹を立てているということになる。義経が、兵法を写し取り、逃亡した後に、大王は、転変地異によって、全てを知る。

大王おほきに驚き、築地に腰をかけ給ひ、つくづくものを案じ、かのくわんきよが兵法を望みて、これまで渡りしを、許さずしてありつるが、天女が、あり所を教へとらせけるぞと思へば、

大王は、天女の手助けによって義経が兵法を手に入れたことに気付いた。そして、その怒りの矛先は、娘である天女に向けられる。

大王おほきに腹を立て、「天女がくわんきよに心を合せたること、疑ひなし。天女がしわざなれば、助けておきてせんなし。」とて、花のやうなる天女を八つ裂きてぞ捨てたりける。

大王によって、天女は、直接殺される。

⑧湛海との対戦については、湛海のような存在はない。なお、怒った、大王は、逃亡する義経を鬼どもに追わせるが、天女から、事前に逃走方法を聞いていた義経は、首尾よく逃げ失せる。従って、『義経記』、『判官都ばなし』に見られるよ

うな、湛海との対戦譚は書かれていない。

〈⑨姫の助言〉については、天女は、義経が兵法を写し取った後、父に見つかるのを恐れ、義経を早々に日本国に帰そうとする。

「……御身を帰し申さんに、さだめて討手向ふべし。その時、塩山といふ法を行ひ、うしろへ投げさせ給ふべし。海の面に塩山出で来、あひ隔たるべし。山を尋ねんその間に、逃げのびさせ給ふべし。……」

逃走方法を教え、この方法で、日本国に帰ることができた。一方、天女は、大王によつて殺されてしまう。

この天女の本地を詳しく尋ねるに、日本相模国江の島の弁財天の化身なり。義経をあはれみ、源氏の御代になさんため、鬼の女に生れさせ給ひ、兵法伝へんそのため、かやうの方便ありとかや。

実は、天女は、江の島弁財天の化身で、義経に兵法を習得させるために、かねひら大王の娘に生まれてきたという。「兵法伝へんそのため」とあるので、兵法取得の援助者としての役割が、『義経記』や『判官都ばなし』よりも、明確に表れている。

〈⑩姫君が死に至る〉については、大王の怒りを買った天女は、八つ裂きにされて殺された。『義経記』、『判官都ばなし』では、義経を恋しく思うあまり、歎き死んでしまう。『御曹子島渡』と『義経記』・『判官都ばなし』の二作品とでは、姫君の死に至る原因が異なる。

しかし、天女が、兵法習得のため生まれたという種明かしとも言える結末が後に添えられ、その点において、姫が死ぬことに重点が置かれていないように思われる。

『御曹子島渡』の特徴としては、『義経記』、『判官都ばなし』には、はっきりとは書かれていない、義経の天女への愛情表現が、『御曹子島渡』には二点、見られる。まず、大王に兵法を写したことが知られる前に、逃げるように促す天女に対して、義経は、

大事出で来、御身の命のがれずは、われも、ともに御身のごとくなるべし。さらずは、葦原国へいざさせ給へ、御供申さん

供に、日本に逃げようと天女に言うが、天女を連れて帰ることはできなかった。また、無事に日本へ帰った義経の枕元に、天女が立ったので、天女の言っていた「ぬれての法」を行うことで、天女の死を知った。

さては疑ひなしとて、歎き給ふこと限りなし。さて、御僧を供養し、御経を読み、さまざま甲はせ給ひけり。昔より今に至るまで、夫婦の中ほど切なることはよもあらじ。かくて、兵法故に、日本国を思ひのままに従へて、源氏の御代とならせ給ひけり。

義経は、死んだ天女のために、さまざまに供養する。『義経記』では、この様な記述はない。また、『判官都ばなし』では、姫君を弔うのは、父の法眼である。この話では、あさひ天女が、義経の兵法習得の犠牲になった為、天女を弔って話を締め括っている。そこには、兵法習得という最大目的を果たして、あっさり天女を見捨てる義経ではなく、弁財天の化身である天女を弔う義経の姿が描かれている。

以上、話の筋の異同を考察して、主題は、義経の源氏再興のための兵法習得でありながら、〈②〉や〈⑧〉に『義経記』や『判官都ばなし』ほど、重点をおいて書かれていない。それに対して、天女が、弁財天の化身として兵法習得のために生まれてきたと語られていることや兵法習得のための犠牲となって死ぬ事が明確に描かれていることがわかる。つまり、天女の兵法習得の援助者としての役割が、他作品より、色濃く表れている。

四 『皆鶴』について

内容について簡略に述べると、義経の吹く笛を聞いて、皆鶴姫がこれを召し、試しに『古今集』、『万葉集』、『伊勢物語』、『源氏物語』、『狭衣物語』のことを問うと義経は、さつと答える。そこで、皆鶴姫は、義経を召し管絃を催す。女房達は、皆、義経に憧れるが、乳母の「れいせん」が義経に文を求めると、その文は乳母も侍女達にも読み解くことができず、姫だけが理解することができた。その後、義経は姫と契りを結び、兵法書を手に入れる。そして、義経は姫に素性を語り、奥州に下っていく。義経は、やがて三年三月で平家を攻めおとした。この作品は、義経の

姫君に宛てた恋文に多くの紙面を割いていることから、一連の鬼一法眼譚の中でも、義経と姫君との恋に焦点を当てている作品と言える。従って、表1を見ても分るように、兵法に関する記述や、湛海との対戦ばなしを省いている。それに対して、笛による出会いの場面や、恋文について詳しく描かれている。

さて、話の内容を見てみると、④笛・⑤歌のやりとりについては、この物語は、義経が、「しんけい」(法眼)の屋敷で、笛を吹くところから始まっており、②兵法の由来を語るについては、書かれていない。また、①兵法伝授を願うについても、明瞭になっていない。

人これをき、ころのうちに、あこかれて、おもしろくぞ、おほえける。
また、

ふえによる秋のしか、ともしひによる、なつのむしも、こひちにまよふ、ならひなり、御さうしのふえに、心をこがし、こひちに、あくかれけるこそ、はかなけれ。さるほとに、はう中の女はうたち、みなく、心あこかれて、心のうち、かたいとの、しとろもとろに、身をこかしけるぞ、かなしき

と笛の音を聞いた、女房らは、皆、義経に恋焦がれる。この物語においても、笛が皆鶴姫や女房らとの出会いのきっかけを担っている。また、『古今集』などの歌集や物語について問われて、義経は躊躇する事無く、答える。そこには、武将として名を馳せた義経像は見られず、義経を笛の名手としてではなく、学問にも通じた人物として描こうとする語り手の意図が窺われる。そして、「れいせん」⁽¹³⁾は、義経に文を出すように催促する。

れんせい、しんけいのはうに、うつり、なふいかに、たひの殿、た、いまの、女はうのたちの中に、おもしろきかたの、ましまさは、たまつさをあそはせ、ととけて、まいらせんと申

しかし、義経は、皆鶴に近付きたいと考えていたので、女房達の読み解けないような文を出す。

れんせい、ちからをよはず、わかすむところへうつり、心をすましてありければ、おもふにかひの、あらはこそ、心あこがれて、をよはぬこひに、まよはれけり

「れいせん」は仕方なく、義経の文を、皆鶴に渡し、「れいせん」は義経への想いを諦める。『皆鶴』は、上・下から成っているが、上巻では、義経の恋文に対する謎解きが書かれている。その中で、とりわけ、皆鶴同様に登場しているのが、乳母の「れいせん」である。「れいせん」については、「めのとのれんせい、ひはの上すにて、ありければ、はちをと、けたかく、ひきたまふ、」と触れられている。また、皆鶴については、「みなつる御せんとて、天下に、ならひなき、ひしんあり、これは、しんけいには、をとひめなり、たいりへ、めさるへしとて、……」と描かれている。この様に、皆鶴と「れいせん」については、その人となりについて、書かれているのに対し、しんけい(法眼)については、描かれておらず、

しんけいも、きたのへさんけいにて、御するなり、

と、しんけい(法眼)が留守の間に、話が進められる設定である。⁽¹⁴⁾しんけい(法眼)の存在は、物語の筋に殆ど影響していないという事になる。つまり、義経と皆鶴との恋愛譚が中心で成り立っている物語と言える。

⑥姫と契り兵法習得について。玄宗と楊貴妃、志賀寺の上人の恋の話や、光源氏と紫の上など、異朝、本朝のおよばぬ恋の物語を語り、皆鶴と契る事に成功した。ここでも、義経が、文学に通じていたという設定になっている。

よしつねも、みなつるも、いつしか、うちとけ、かたらひあかしたまふに、よしつね、おほせけるは、なふいかに、みなつるこそ、まことやらん、うけたまはり候へは、大たうよりも、わたりたる、ひやうほうのまき物、此たちにあるよし、きいてあり、一めみんとぞ、おほせける

義経に兵法書を見せるよう求められても、皆鶴は、さほど、困惑する事も無く、義経の願いを受け入れる。そこには、『義経記』や『御曹子島渡』に見られた、姫(『御曹子島渡』では、あさひ天女)の苦悩や悲壮感は感じられない。

みなつる、きこしめし、さはかり、ほうけん、一のてんかの、てうほうとて、ほうさうに、こめてをき、たまひしほとに、女の身の事にては、そらおそろしく、はんへれとも、君のおほせにて、さふらへは、とりいたして、まいらせん、やすきほどの御事とて、いちく、とりいたして、よしつねに、わたしたまふ、これをわたし、あるならば、きみとちきりは、いつまでも二世のた

のみ、ちとせをふるへき、こ、ちして、すゑの世と、かたらひて、ふかく、おほしめしけるこそ、はかなけれ

こうして、義経は、兵法書を手に入れ、しんけい（法眼）に見つかることもなく、素性を明かす。

〈③素性を明かす〉について。兵法を習得した後、義経は、姫君に素性を明かしている。

なふいかに、みなつる御せん、われをは、たれとかおほしめす、よしともには八なん、ときははらには三なん、うしわかと申、くわしやてあり 七さいのとしより、くらまのてらにのほり、かくもんよきに、きはめしか、あんけんくはんねん、十五にて、かうしう、か、みのしゆくにて、けんふくし、そのなを、けん九良よしつねと、なのり候なり

兵法習得後に、素性を明かす事になっているため、源氏の嫡流の子息である事を利用して、皆鶴と契ったわけではないので、この時点で、素性を明かす事は、兵法習得、皆鶴との恋愛という両方の話の筋に影響を与えていないように思われる。また、しんけい（法眼）が、義経が皆鶴と契って兵法を習得した事に気付いていない為、怒って、殺そうという話の筋も存在しない。

また、この物語の最後に、

かくて、よしつねは、おくをさして、くたりたまひて、ひてひらか、まうせいを、そつしたまひて、おこるへいけをせめしところは、いつくそや はりま、つのくにの、さかひなる、一のたにを、せめおとし、あきには、ぬたのお（ぬたのしやう）、すわうに、こくろ、ひせんのむろ山、なかと、八しま、たんのうら、おこるへいけを、三とせ三つきに、せめなひけ、いまたうたいに、いたるまで、けんしのみよはさかへ（マ、）なに事も、かりそめとは、おもへとも、一つには、ひやうほうのとくと、おほえたり、めてたくさかへ、すゑはんしやう、ならひなし、おなし世に、あるならば、かやうの事こそ、あらまほしけれ

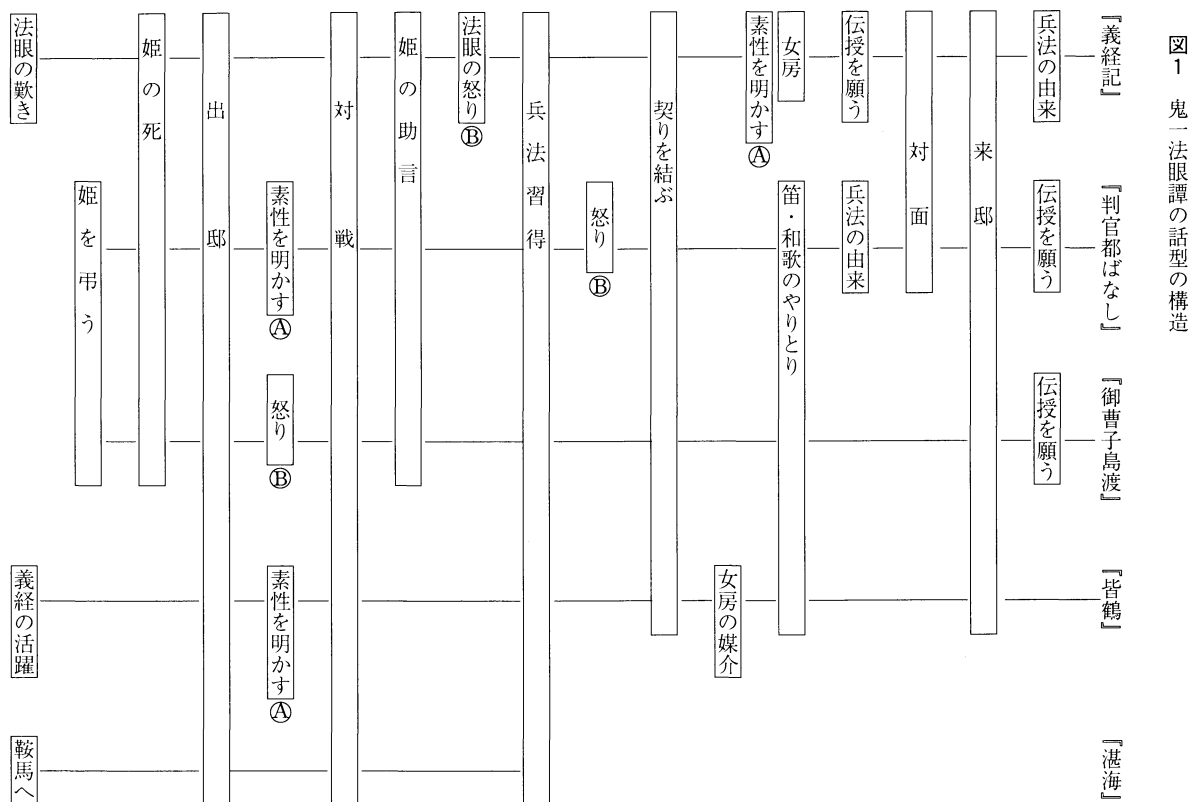
と、義経が、後に、軍で勝利を治めて、源氏の御世になるのも、この兵法に依るものと結んで終わっている。

最後に、兵法習得によって、義経のその後の活躍があると完結している事から、兵法習得が、話の大前提となっている。それに加えて、皆鶴との恋愛、乳母「れいせん」の副主人公としての扱い、恋文の謎解き、笛や管絃、という趣向に重点をおいて描いていることがわかる。兵法習得が、大前提の話ではあるが、そのわりには、兵法の由来や、その威厳性を語る場面がないため、最終部に記された義経の活躍も、兵法に依るものと締めくくっている点には、違和感がある。

五 鬼一法眼譚の異同についてのまとめ—図1を参考に—

まとめとして、異同が話の筋に、顕著に影響していると思われる二つの場面について、述べたい。第一点として、素性を明かすということについて（図1の④を参照）。義経が物語中において、自らの素性を語る事になっているのは、『義経記』、『判官都ばなし』、『皆鶴』の三作品である。中でも、『義経記』は、女房「かうじのまつ」に素性を告白することになっている（他の二作品は、いずれも、姫に対して、告白する）。姫と契りを結ぶ以前に、素性を明らかにしておくことで、姫との結婚に有効に働いたと考えられる。一方、『判官都ばなし』、『皆鶴』では、姫との契り、兵法習得、湛海との対戦の後に、姫に素性を明かしているため、話の展開には、影響がないと思われる。『義経記』のみが、物語の早い段階で素性を明かすことで、その後の兵法習得等に影響を与えたと考えられる。

第二点として、鬼一法眼の不在が挙げられる。『義経記』、『判官都ばなし』、『御曹子島渡』、『皆鶴』には、鬼一法眼（『御曹子島渡』では「かねひら大王」）が登場する。しかし、『判官都ばなし』、『皆鶴』では、義経が姫君に求婚する場面において、鬼一法眼は不在である。『判官都ばなし』では、義経が姫に近付いていると知りつつも、鬼一法眼は、その現実から、目を背ける様にして、熊野詣へと出掛けてしまう。『皆鶴』でも、やはり、鬼一法眼は北野へ参詣することになっており、義経が皆鶴姫の許へ忍んで、契りを結ぶ際には留守である。つまり、鬼一法眼が登場しなくても、話として成立していることになる。鬼一法眼は、兵法の所有者として、鬼一法眼譚において、主要人物の一人であるはずだ。それにも関わらず、鬼一



法眼が不在で物語が進行している点で、『判官都ばなし』と『皆鶴』は、兵法習得を軸にしながらも、義経と姫との恋愛・結婚に焦点を当てて展開している。また、鬼一法眼の義経に対する怒りの原因について、少し述べたい(図1の①を参照)。

『判官都ばなし』では、兵法習得以前の娘と契った後に、鬼一法眼は怒っている。その理由は、

賤き東の冠者婿に取りけるかなど、嗤せ給はん事面目なき

というものであった。殿上人からの結婚の申し入れがあり、北の政所か后になったとしてもおかしくないほどの自慢の娘が、弟子にも認めたくない田舎者の冠者が婿となってしまう事に対する怒りである。一方、『義経記』と『御曹子島渡』では、姫(『御曹子島渡』では「あさひ天女」と契り、兵法を習得した後であることから、鬼一法眼の怒りの理由は、先ず、大切に育て上げた娘と契ってしまったことに対してである。しかも、平家全盛の時代に源氏の出身である義経が婿となってしまう(これに関しては、『義経記』のみ当てはまる)。平家への顔向けや、殿上人らに対する面子を気にする法眼にとっては、許し難い事実であったはずである。さらに、秘蔵である兵法まで盗み取られてしまったという二点が『義経記』での怒りの理由である。以上の事から、『判官都ばなし』と『義経記』、『御曹子島渡』では、鬼一法眼の怒りの理由が異なっていた。『判官都ばなし』では、義経との結婚に対して怒っており、湛海戦に持ち込む動機としては、弱いと思われる。『義経記』での鬼一法眼の怒りは、湛海戦へ持ち込むための動機付けと考える。

おわりに

鬼一法眼譚を扱っている一連の作品は、「鬼一法眼や兵法書に纏わる話」と「姫君や侍女が活躍する話」という二重構造になっている事が分った。『義経記』は②兵法の由来を語る⑧湛海との対戦に重点を置いて書かれている事からも、「鬼一法眼や兵法書に纏わる話」寄りであると考えられる。しかし、義経は姫によって念願の兵法書を手に入れる。それに加え、法眼が湛海を派遣して、討とうと計画するものの、姫の助言によって、その企みを知ることになる。二度も、姫に助け

てもらう筋書きである。また、義経と姫との出会いを手引きするのが、「かうじのまつ」という女房である。姫は、名が記されていないのに対し、女房の「かうじのまつ」は名前も出ており、義経と姫との出会いや、姫が、父法眼に内緒で『六韜』を持ち出す際にも、手助けしている。以上のように、要所において、姫と女房が、義経の兵法習得に役かっている。

また、『判官都ばなし』については、内容は、『義経記』とほぼ同じと言える。

『判官都ばなし』の他作品と特異な点は、兵法書の由来を詳しく語っている点、義経の後日譚が、湛海戦の前に挿入されている点である。また、『義経記』同様に、姫との出会いにおいて、女房が介入している。そして、やはり、姫の名前が出ていないのに対し、「更科」をはじめ、何人かの女房らの名があげられている。

『御曹子島渡』では、弁財天が「あさひ天女」という仮の姿で現れた話である。

従って、天女の兵法習得の援助者としての役割がさらに明確になった作品である。

『皆鶴』においては、鬼一法眼が留守の間に、話が進行する点、湛海との対戦譚がないということからも、「鬼一法眼や兵法書に纏わる話」を極力排除して、義経と姫との恋愛譚を際立たせた物語であることが分った。

『義経記』、『判官都ばなし』は、「鬼一法眼や兵法書に纏わる話」に厚みを持たせて書かれており、『御曹子島渡』、『皆鶴』は、「姫君や侍女が活躍する話」に焦点を当てて描かれている。以上の鬼一法眼譚については、二重構造（「鬼一法眼や兵法書に纏わる話」と「姫君や女房が活躍する話」を意識のうちに置いて、考察すべきだと思われる。重点の置かれ方は異なっているといえる。しかし、同じく鬼一法眼譚を扱った謡曲『湛海』については、義経と湛海との対戦のみで成立している作品であるため、二重構造に当てはまる作品とはいえない。

使用テキスト

- 『義経記』新編日本古典文学全集『義経記』梶原正昭 小学館 平成12年
 『判官都ばなし』『近古小説新纂』島津久基 有精堂 昭和58年
 『御曹子島渡』日本古典文学全集『御伽草子集』大島建彦 小学館 昭和49年
 『皆鶴』『室町時代物語大成 第十三』横山 重・松本隆信編 角川書店 昭和60年

注

- (1) 以下、へゝ内の数字は、表1の数字と照合していただきたい。
- (2) 版本では、「幸寿の前」とある。新編日本古典文学全集の本文では、「かうくのまつ」とある。ここでは、「かうじのまつ」に統一する。
- (3) 「昔異国に、漢の高祖と申賢王まし／＼けり。／＼それより張良・樊噲とぞ呼ばれける。」およそ六ページに渡って書かれている。
- (4) 最初から義経からの文として渡すのではなく、主の分らぬ落し文が姫君宛てであったため、他の女房に見られぬように拾ったとした。そして、返事を書くように促し、書かせて姫君が安心したところで、義経の存在を語っている。「更科」の賢さが表れている場面である。
- (5) 野中直恵氏が「『義経記』の文芸世界——構想と構造の相関から——」（『軍記文学研究叢書11』『曾我・義経記の世界』所収 汲古書院 平9）の中で、『義経記』における義経と姫君との文のやりとりについて「これは結婚の形式的な手続きで、周辺伝承のように和歌の才覚によって結婚が実現されたとは言えない。」と指摘されている。
- (6) 『義経記』では、兵法習得後に怒りの場面がある。「法眼大きに怒りて、「世になし源氏を入れ据えて六波羅へ聞こえなん後、何かよかるべき。今生は子なれども先世の敵にてありけるや、斬り捨てばや。」と思へども、「子を害せん事、五逆の罪通れがたし。異姓他人なり。これを斬りて平家の見参に入れて、勲にもあづからばや」と思ひ……」と書かれており、娘を奪われた怒りと、平家に取り入ろうとする鬼一法眼の姿が浮き彫りになっている。
- (7) 「義経伝承の系譜と展開——鬼一法眼伝承をめぐって——」（『軍記文学の系譜と展開』梶原正昭編所収 汲古書院 平成10）
- (8) 野中氏は前掲の論文の中で、「娘の忠告場面の機能不全」と述べられており、また、一方において、「義経の、鬼一の策略を知ってもひるまない勇敢さや、娘の頼みを受け入れないつれなさを表現するために存在している——娘の忠告を聞かない義経像を表現するところにこの場面の存在意義がある——と見ることもできる。」とされている。
- (9) 『義経記』巻第六「判官南都へ忍び御出である事」で、勤修坊の得業との別れの場面で、「師弟子は三世と申し候へば」と記されており、「七世の契り」という表記は、他には見当たらないらしい。（全集本の頭注による。）ここでは、師弟の関係の深さを強調する意味で用いられたのではないか。
- (10) 『義経記』巻第二「義経鬼一法眼が所へ御出での事」の中に記されていないということ。『義経記』での笛の記述は、巻第三「弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事」「弁慶義経に君臣の契約申す事」で義経が笛を吹く描写がある。
- (11) 『御曹子島渡』において、笛の威徳が語られていないことに關して、島内景二氏は、『御曹子島渡』——女性の援助——（『御伽草子の精神史』昭和63）の中で、『御曹子島渡』

の作者には、大きな創作上の制約があった。それは、この笛の霊力をあまり強調しすぎではならない、というものである。この笛が如意宝であることは確かだが、それを強調してしまうと、わざわざ千島まで「大日の法」を獲得すべく出かけてゆく必然性と必要性がないということになりかねないからである。笛と大日の法を記した巻物、というように、この作品には少なくとも二つ物質化された如意宝が存在する。その混在をできるだけ目立たないようにするため、作者は笛の来歴や由来については具体的には触れなかったであろう。」とされており、首肯されるべき意見である。

- (12) 黒田日出男氏は「政治秩序と血——『御曹子島渡』のイデオロギー」(『歴史としての御伽草子』ぺりかん社 平成8)において、「『御曹子島渡』の物語のイデオロギーは、一世の親子の縁よりも、二世の夫婦の契りを優先・優越させ、しかも妻の犠牲によって源氏の御代つまり政治秩序(君臣関係)が獲得されるというものであった。」また、中世において、このような、夫婦の縁を、親子の縁より優先させるという考えが「社会が女に突きつけた選択」と論じられている。この『御曹子島渡』に表現されている主題が、御伽草子の特質ともなっていることを指摘されている。

- (13) テキストには、「れいせん」とも、「れんせい」とも出てくる。ここでは、「れいせん」に統一しておきたい。

- (14) 野中直恵氏は、前掲の論文(注8)において、「現存の『みなづる』は、二人の結婚に至るまでの経緯には多くの筆を費やしているが、当の兵法保持者である鬼一(『みなづる』では「しんけい」)については、人物造型はおろか、物語への登場すらない。」と指摘されている。つまり、このような、鬼一法眼の不在である「結婚系」は鬼一法眼伝承の原型ではないと結論付けられている。